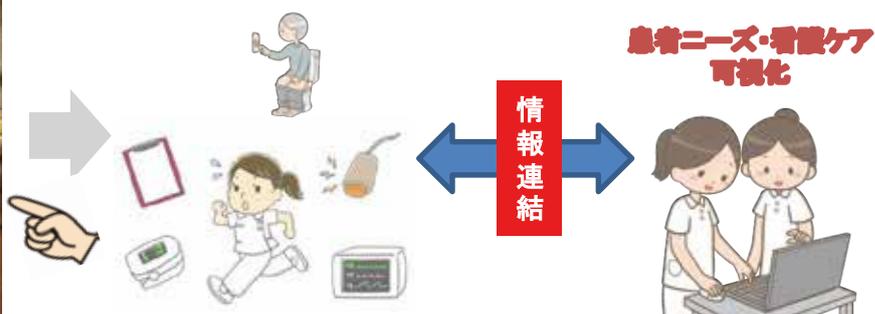


テーマ：ナースコール履歴情報で 患者の生活パターンと看護ケア量を可視化

■ 背景

ナースコールは、入院患者が看護師などのスタッフをベッドサイドへ呼び、何らかの身体異常、点滴終了、排泄や移動介助の希望などの生活ニーズを伝えるためのシステムである。多くのナースコールは突然の症状変化や様々な患者ニーズにより鳴らされるため、予測が難しい。入院患者の高齢化により予測困難なナースコールは増加している。

さらに、離床センターマットを設置している患者においては、患者の離床行動によりナースコールが鳴る。ナースコール対応は、作業中断によりインシデント発生に影響したり、看護業務量の増大につながっている。しかしながら、ナースコールの対応頻度は、看護必要度の評価には含まれない。



<出典：看護roo!>

■ 課題と期待される成果

ナースコールの時間情報と電子カルテ情報の連結により、患者の行動パターンの把握や看護ケア量の把握につなげるシステムを創出できる。これにより、

- ①患者の一日の生活パターンの把握につながり、ある程度予測した対応が可能となる。
 - ②医療従事者側は事態に余裕をもって対応することが可能となり、業務負担の分散やインシデント発生の抑制につながる。
 - ③ナースコール頻度とケア内容が定量評価され、看護ケア量の可視化が可能となる。
- この課題を抜本的に解決してくれる方法を求めています。

■ 市場性

コール回数は診療科や時間帯、患者の重症度等によっても異なる(整形外科は少なく、神経内科が多い傾向があり、神経内科患者のコール回数は8.6回/日に及ぶという調査報告もある)。コール対応業務が可視化できれば、看護必要度の評価の加算にも適用される可能性がある。

厚労省調査によると2018年の病床数は全国で164万床と報告されている(病院、一般診療所、歯科診療所)。それら施設で既存設備との置き換えを考えると、大きな市場性があると考えられる。

■ 臨床看護学講座老年看護学ホームページ

<http://www.shiga-med.ac.jp/~hqronen/index.html>